五井蘭洲『萬葉集詁』中（翻刻）

北谷幸册

萬葉集詁　四　五　六

（内扉題）

草木穀菜

以　いつもの花　仙云、いつはほむる詞。藻の花也。見安云、出藻。

いつしは　市柴又楪柴又五柴とも書。いつかと云にかけたり。いちひの柴なり。

いろつきあふ　草木の露霜にそむるなり。

いは小すけ　岩根に生する菅也。

いちしの花　契云、蓬蓼也と。いちこの事也。これ仙説也。季云、八雲抄羊蹄といへり。和名しふ草又し也。愚案に、今俗其根をしのねといふ。

いはつな　石綱と書。諸注分明ならす。愚案一種のものゝ名なるへし。下のつゝきは又わかえつゝと有。いはひは

（一オ）

なといふ草の冬は赤くて春は青くなる類か。

いはとかしは　石と柏と也。諸説分明ならす。石の異名といふ説まされり。

は

はる　春ははりつゝ秋はちり来ると有。木の葉也。はりは木の芽のはり出る也。此哥木の葉をいはすしてかく詠り。

はき　秋はきとも、さのはきとも。榛の字用ひたるははりの木なり。ものを染る物也。芽子の字用ひたるは常のはき也。これも衣にすりつくる也。又紫草と書たる有。これ又染草也。又今俗よめのはきといふも哥に詠るとみえたり。甚混して分明ならす。

はなちらふ　花のちりかふなり。

（一ウ）

はたすゝき　穂に出てなひくか旗のことき なり。

はき原　榛原と書。はりの木也。東国にてはんの木といふ。

はまゆふ　みくまのゝ浦の濱ゆふもゝえなる。

はまおき　神風のいせの濱荻とつゝく。

はねす　色のうつろひやすきとつゝく。はねすは未詳。朱花といへり。朱花は蓮也。紅蓮は白にうつりやすき故にいふか。采要云、木芙蓉と有。

はなかつみ　菰也。愚案、菰には花なし。花菖蒲ならん。

はなつま　萩の花也。鹿によせていふ也。鹿のために萩はつまのことし。

はつもみち　初紅葉也。

（二オ）

はなすゝき　契云、おほくはたすゝきと詠り。はなすゝきとはたゝ一首あり。

はなくはし　草木の花をほむることは也。

はまひさき　濱にある楸也。又古木をいふとも。

はまな　礒菜と同し。

はまつゝら

はなつま　花の間也。

はれる柳　芽のはる柳也。

はなえみ　花のひらく也。

尓　にのをなす　凡種の出る時、すこし赤き故いふと也。

につゝし　赤きつゝしなり。

（二ウ）

にこくさ　いつれにも柔なる草也。花とも詠り。十六巻に詠るは萩ならんと契云。

にほひ　秋の葉のにほへる時と有。秋の木の葉の色つく也。いにしへは色あるをにほひと云。又春花の匂ひさかへて、又秋のはのにほひにてれるとも。

保　ほむけ　穂のむかふ也。秋田のほむけのよするとつゝく。

ほたち　秋の田のほたちと有。稲穂の立也。

ほたて　ふるからとつゝく。蓼の古きからより生す

る也。

ほよ　山のこぬれのほよとると有。季云、寄生といへり。葛なとのやとりたる也。かつらの類也。

かさしにすると有。

ほゝかしは　厚朴也。

（三オ）

と　ときしくのかくのこのみ　ときしくは非時と書。時わかぬこゝろ也。かくは香はしき也。橘也。

とかの木のいやつき〳〵　とかはとこと同し。とかといふ木にかけてかはらぬことをいふ。

ときわ　契云、常盤なれはときは也。橘をほむるなれは、とこは成へし。はゝ葉也。常に葉あるゆへなり。

とこはな　橘はとこはなと有。常に花さけかしと願ふ也。

とをのたち花　たち花の数多き也。季云、遠方の橘故也と。

とふさたて　あしから山とつゝく。

とこよものこの橘　とこよの物也。すへてとこよといふは神仙の境を云言にて其実事は上国をさす。只唐也。

（三ウ）

ち　ちりのまかひ　花のちりまかふ也。

ちゝの実　ちゝといふ木あるよし也。仙云、楊梅に似てくるみの実のことき実ありといへり。父をいはん奥のことなり。

於　をみの木　もみの木なり。

をにのしこ草　鬼の醜はかさね詞也。こゝは忘草をしかる言なり。わすれ草にはあらておにのしこ草なるかえ忘れぬと也。しこほとゝきす、しこのますら男、皆同し。

をはき　春野のをはきつみてにらしもと有。うはきともよめははき也。

おふくさふし　さを鹿のおふくさふしと有。

おもひ草　契云、此草たしかならす。先は竜膽といふに

（四オ）

よると。

おほゐ草　大蘭草といふ心か、しからは蒲のことかと契説也。愚案、今つくもと云草あり。是なるへし。

おとこをみなの花　ものゝふのをとこをみなの花と有。仙云、おほとちと云草也。是を男女郎花と云とあり。袖中云、おほとちは、花をみなへしに似て白し。されはおとこへしともいへり。

おゝり　花さきおゝりと有。花のさきおほひかさなるなり。

和

わかたち　萩のわかたちと有。末のわかき葉也。萩にていへり。

わさ田かりかね　早田をかるころ雁の来れはなり。

わさほのかつら　早稲の穂のなかくてかつらのこと き也。

（四ウ）

加

かるかやのつかの間　時候門に出す。

かつら　わかゝつらきと有。楓の字をかつらとよむ。

からあゐの花

かほはな　野邊の容花と有。一名ならす。いつれにても同し。仙云、かきつはたといへり。

かしのみのひとり　かしの木の実は、からにひとつのもの也。故にひとりといはんとていふなり。

かけくさ　山かけくさ、又岩、又水かけくさの類也。ものゝ陰なる草なり。

かへ草　壁に生する草也。季云、諸説かきにすへき草と也、外に正義ありと。

（五オ）

かり菰　苅也。契云、菰をむしろとするより直に名つく。

かたかこの花　不詳。かたかしといへるは誤りと契云り。季云、つゝしに似たりといふ。

かたらひ草　態藝門。

かりそけ　同右。

かふこ　蟲部。

田

たま藻　江海の藻をほむる詞也。

たまかつま

たむけ草　草にあらす。松にても神に手向るをいふ。凡草といへは木をこむるなり。

たえの穂　契云、たえは白き也。穂はあらはれ出たるを云。白く

（五ウ）

みゆる也。こゝは霜をいふり。（ママ）愚案、白き穂也。すゝきならん。

たまもなす　なすは如也。玉藻のことくなり。

たまかつら　みならぬとつゝく。玉かつらは実のならぬ物とみえたり。又影ともつゝく。かつらを置たる姿のうつくしき也。又たゆることなくとも。

たまゝつかえ　松を賞していふ。

津

つら〳〵つはき　こせ山のつら〳〵つはきつら〳〵は、連る也。つはきの花は、おほくつらなる故なり。

つきの木　槻の字なり。

つちはり　草也。物を染る草也。和名に王孫也と。

つほすみれ

（六オ）

つはなぬく　浅茅かはらとつゝく。

つまゝの木　まつといふより、妻をまつと解り。一種の木の名にあらす。

つみ　さ枝とつゝく。契云、桑也と。

つまゝ　不詳何木。

つき草　うつろひやすきと有。物にすりいれてさて外の物へうつすにうつりやすし。又かりなる命とつゝく。契云、月草は朝に咲て晩にしほるゝ故かりなるといへり。愚案、月草はある花也。紙にうつし置て外へうつす故、かりに染て置也。早くしほむをかりとは云へからす。季云、此花月影にさけは月草といふと有。朝露をさきすさひたる月草のひたくるともにけぬへくおもほゆ

（六ウ）

はやくしほむ故かりといふも可也ともいはむか。

奈

なゆたけ　柔竹也。女竹也。とをよるとつゝく。たはむ故なり。

なき　うえこなきと有。又なきのあつものとも。延喜式には供御にそなふと有。今の水あふひの事

といふなり。

なてしこ　石竹と書り。

なゝふ菅　七相菅と書。見安云、姿斜なる菅也。又天によそへていふ。

なのりそ　又ひつき野邊なるなのりその花とも有。契云、花は春さくか、必しも海底に生するものにあらさるか。

なはのり　縄海苔と有。

なつそひく　うなかみかたとつゝく。うは苧也。夏に成て

（七オ）

麻を引ぬくなり。

なからへちるは　花のちるを水のなかるゝ心にいへり。

むらさき　あかねさす紫とつゝく。紫も赤き類なる故かくつつけたり。又花ともつゝく。但これは別也。萩をいふなりと。

むすひまつ　有馬皇子賜死時の故事也。

むすき　杉の名なり。

むくらふ　むくらのしけりたる也。

宇うえ木　こまとつゝく。前に植る木也。こまは木の間也。

うつ麻苧　麻を打てほそくするなり。服食門。

うはき　草の名なり。契云、これはよめかはき也。季云、莪なり。をはきともよむ。

（七ウ）

うれわゝらはに　末のわか葉也。わゝ誤り也。わくらは也と契云。

くくさむさす　草の生せぬなり。むすは生也。

くゝめり　梅もくゝめりと也。又ふくめりとも、又ふゝめりとも、つほみの事なり。

くゝたち　蔓菁の茎のたちたる也。かみつけのさのゝくゝたちおもはやしと有。

山すけのみならぬ　山菅の実ならす也。

山たちはな　平地木の類也。俗にやふかうしと云。

やなきの眉　柳のわか葉をいふ。

やまちさ　仙云、田舎人はつさの木といふといへり。季云、いほたに似たる木也と見安にいへりと。

ま　まつか枝のさかへ　松柏の栄へ也。
まきのつまて　つまては木のうつくしきなり。
まきさく　木をさくなり。
まきたてる　大木のみことにしけり立る也。木の名にあらす。
まゆみ　あたゝらまゆみと有。陸奥の名所。
まこ枝　木の小枝なり。
ふ　ふゝりたりとも　花のつほみたりとも也。
ふせ木　をしふみと有。山中の倒たる木ををしなへて行也。又ふせに禁の字を用ゆ。しかれは人を通さぬ防禁の木のあるをかまはすとをりゆくともいふへし。
ふかみる　海底のみるなり。

（八ウ）

ふちなみの思ひまとふ　藤つるの木にまとふより云詞也。
ふゆ木　上にふる雪と有。冬葉の落たる木なり。又冬木の梅ともあり、葉の落る木なれはなり。

（八オ）

こ　こつみ　木屑と書。ちえの浦わのこつみなすと有。又糞の字を用ゆれと屎にはあらす。木のきりくすこけら也。浪にゆらるゝもの也。
こち〳〵の枝　つきの木のこち〳〵の枝とつゝく。こち〳〵は、をちこちの枝なり。季云、こと〳〵くの枝也。
こたるまて　木の枝のふりてたるゝなり。
こむら　木の茂りたる也。草むらに同し。
こい草　態藝門に出。

（九オ）

こぬれか下　樹木のおほき下也。木末の下也、季説。
こすけ　おき中のとをちの小菅と有。
こぬれ花さき　木のうれ花咲也。うれは上也。木末と書。
こぬれかくれ　こぬれは木村也と季云。
このまたちくき　ほとゝきすの木の間をとひくゝるなり。
このてかしは　児手のことき かしは也。又やひらてともいふ。西行の哥に、このてかしはの花咲に

けりと詠るは別物なりと季説也。愚案に、かしはは槲也。やひらて同し。葉の形手のひらに似たり。神の供物をのするもの也。延喜式に乾槲青槲と有。このてかしはゝ葉の小なる也。すへて裏表のもやう同しき葉也。今醫家物産家側柏といふも誤り也。柏は

（九ウ）

皆檜の類なり。

江　えたもとをゝに　枝のたはむ也。こゝは萩にて云。

えく　菜の名。契云、芹也。新六帖えくに半夏と書。

えの実　わか門のえの実と有。榎樹の実なり。

安　あし引の木の間　あし引を直に山とせり。

あはをによりて　玉の緒をあはをによりて、水の泡はむすふゆへあはをと云。契云、あはをといふ一名かと云。季云、あはせたる緒也。

あしひ　なすさかへし君かと有。仙云、あしひといふ木あり、能さかへる木也といへり。又あしひの花とも有。あせみなりといへり。第七巻にあしひとあるは別か。

あえたちはな　契云、今の花柚のことをいふかと、袖中抄に云

（一〇オ）

食経云、橙和名安倍太知波奈似柚而小者也。又格物論を引て橙橘属樹高枝葉不類別橘又有刺大者如抔苞黄皮厚香氣馥郁可以薫衣可以漬密真佳果也。又あゆるみとも有。是橘の実を云。仙云、たへたる実なり。たちはなは次の年花さくまて堪てあるこのみといへり。あゆるは交る也。実のおほくて交るなり。

あきの穂　稲穂なり。

あきかしは　ぬるや川邊と有。秋柏とあるを契沖はあさかしはと詠り。ぬるといふは、葉のしほみいることか。朝いまた葉のひらかぬなり。

あしに　大舟にあし荷かりつみと有。芦を苅て舟につみ

（一〇ウ）

たるなり。

ありますけ

あをやなき　翠柳也。
あさ菜　朝に菜をとる也。
あをな　蔓菁と書り。
あしつき　注に水松也といへり。
あから橘　たち花の実の赤き也。あかる橘也。うす
　にさしつゝとあり。
さ
さねかつら　後もあはんとつゝく。かつらは色〳〵
　にはひゆきて後には又一所にもなるものなり。
さき草　中にを寝んと有。三枝也。其中にいぬると
　なり。又
　　（一一オ）
　春まつさき草と有。季云、桧木也。さい草とも
　いふ。
さしすき　くるすとつゝく。直に立たる杉也。指進
　とかけり。杉にはあらすともいへり。季云、さ
　しつくとす。栗の縁也。
さね木　契沖云、真木と云心、又さね木の花と有。
　諸木の花也と、季云、さね木の花はねむの木也
　と。又ちいさき枝ともするなり、又季云、柳也
　と。
さくら麻　桜さくころ種まく麻也。をうとつゝく。
　麻と苧との縁なり。
さす竹　契云、さゝ竹のことか。季説同意十五巻哥
　に大宮人とつゝく。此季注に此集の秘訣なりと。
さすやかん　さすは小竹也。さゝをたき物にするは
　貧家なれはこや
　　（一一ウ）
　と受たり。
さきをせる　花のさかりとなる也。
さにつらうもみち　さには赤土也。朱也。つらふは
　助語也。赤き紅葉といふ事なり。
さき竹　そかひにねしそとつゝく、そかひはそむく
　なり。さき竹は、竹をわれはうしろあはせにな
　るとや。うしろむきて男女のいねたる也と季説。
さきをせる　花さきをせる也。季云、さく事をする
　也。愚案、さきからむらせる也。
さ　わか草をとれると有。さは草也。
さすやなき　根はると受たり。柳の枝をさせはよく

つきて　（一二オ）

根のはるゆへなり。さし柳とも。

起　きはむ木の葉　秋山にきはむ木の葉。

由　ゆう花　木綿花と有。見安云、木綿花といふ木あり、花如芙蓉如朱杯子、童蒙抄云、同上。

ゆうかけ草　暮ころかけろひたる所の草なり。

ゆたねまき　あらきの小田と有。種ものをぬる湯に漬まけは生しやすき也。季云、ゆは五百也。種々のたなものなり。又ゆたけき種とも。

ゆきあひのわせ　凡両方より出合ふ事を行合といふ。両人して植たる稲田か。

ゆさゝ　ゆは、い・をの合せたる也。五百也。おほき詞也。さは小竹也。　（一二ウ）

米　めさまし草　目に見てよろこふ草也。暁の目覚くさと有。一草の名にあらす。

みくさ　真草也。草を賞していふ。みくさかる信濃ともあり。又諸草とも、すゝきともいふ、又みくさ花とも有。

みつ枝さし　木は左右へ枝さし中に身木ありて三枝也。さいくさとは是なり。季云、わかき枝と云。

みつくり　栗の実は多く三つありて中なるか大なり、故に中といふ枕ことはに用ゆ。

みつかけ草　水邊の草なり。

みつ蓼　穂つみとつゝく。

みかさにぬへる菅　（一三オ）

みしますけ

みよし野ゝみくまか菅

みる　海松菜也。又ふかみるとも、又またみるとも有。ふかはふときなり、または岐のおほき也。

之　しのをゝしなみ　しのは繁き也。しけく押並て也。しのにといふへきにをといふは古語の例也。又しのは小竹也。小竹を押ふせしきものとすともみるへし。

しらゆう花　器財門に出す。

しのすゝき　くめのわかことつゝく。

しらつゝし　白躑躅也。

しつ菅　河の静菅と有。川水の深き所に生したる也。

（一三ウ）

しのゝめ　篠の上なり。

したり柳

したひ　秋山のしたひか下とつゝく。紅葉にてひかる也。

しり草　契云、藺なるへし。仙云、鷺の尻刺といふ草なり。藺の一名なり。

した草　軒の下くさと有。契云、しのふ草也。愚案今正月に用る山草をしたといふ、形大小の違ひにてよく似たり。こゝのしたは下の字の心にあらす、しだなり。かれは山にあるした草なり。是は人家の軒にあるしたくさなり。

しなひ　萩のしなひと有。枝たはみたる也。藤のしなひ、柳のしなひと同し。こゝは女子の姿の島娜たるにたとふ

（一四オ）

又萎をしなひとよむ、しなびしほたれたるなり。君にこひしなへうらふれなとゝあり。

しの　夏山の梢のしのとあり。繁の字を用ゆ。梢の茂み也。

しきみか花　おく山のしきみか花と有。しく〳〵と云を受たり。

ひとよ　花の一重なり。

ひさき　木の名。去年さきしと有。一説に、古く久しき木なりと。

ひえ　稗也。稲にましりて生するも長するまゝにえらひぬかるゝなり。

ひる　蒜なり。

もと葉　萩のもと葉は色つきにけりと有。もと葉の紅葉とも有。

（一四ウ）

もかり舟　藻を苅とる舟也。

もゆる　春の柳は萌にけるかもと有。

もみつる楓　もみちする楓なり。かへるてともよめり。蛙の手に葉の似たれは也。もみてるとも有。

もみたす　紅葉する也。もみたひにけりとも、又も

みつとも。

もすの草くき　奥義抄の説用ゆへし。はやにえとは別也。

もゝさゝ　小竹のおほきなり。

もいつく　殖の字也。多くふゆる也。

もくさく　岩つゝしもくさくと有。もくは茂く也。契沖云、もくは木工と書り。季云、もくは仙覚点也。古点にこくさくと有、色の濃くさく也と云。又夫木集後九条

（一五オ）

殿哥に、

秋の日のいその浦わの海士人はきくさく道に塩やくむらん

となり。是は木工をきくと讀故也。かた〳〵うたかはしきなり。文選の中に茂の字をしけくとはよますして必もくとよめり、片山のもむ楡と有。このもむも茂のこゝろ也といへり。

もゝよくさ　月草也。百夜花さくゆへなり。

須すかの根のねもころ

すけの実　是は山菅也。麥門冬なり。

すゑつむ花　くれなゐのすゑつむ花と有。紅花なり。

（一五ウ）

鳥獣蟲魚

以いさな　とり海邊とつゝく、又あふみとも。いさは勇なり、なは魚也、海中湖中の大魚也。鯨にかきらす、勇魚とも書り。季説に礒菜取と義をとる所有。

いるしゝの　心をいたみとつゝく。人に射られたる鹿也。

いそ貝　あはひ貝也。からの片〻ある故に片恋といふに詠り。

いかるか　鳩の類なり。

いをつとりたて　朝猟にいをつとりたて暮狩にちとりふみたて

いとらかこゑ　季云、うつらの声なりと。

（一六オ）

半はふれにちらす　鳥に（ママ）羽にふれて花のちる也。

はなちとり　はなち飼いにかふ鳥なり。

はねきる　鴨そはねきると有。羽たゝきをする也。
はいま　早馬也。はいま路とつゝく。駅馬なり。
はふり　鳴鴨を詠り。羽をふるひなく也。
はつこゑ　ほとゝきすのはつ音なり。
はつかりの使　人倫門。
はつとかり　態藝門。
保　ほつたか　心に得たきと欲する鷹也。
と　とひくゝ　鳥の飛くゝるなり。
とりか鳴　あつまとつゝく。袖中云、東南の天雞初て

（一六ウ）

なくに、天下の鶏みな鳴といへは、東国をかくつゝけたり。
とかり　態藝門。
とりへなす　鳥の飛ふことく也。
とくらたて　凡鳥のすむ所也。又ゆひともつゝく。
とりをしも　契云、をゝしものと讀へし。鳥は馬の誤りなり。をのこしきものにて婦人のことく小児をいたくなり。
とあみ　鳥をとるあみなり。
ぬ　ぬえことり　こは助字也。怪鳥也。かたこひのつま又のとよひをるともつゝく。

（一七オ）

を　をちもかやすき　鷹の鳥をうつことのやすきなり。
をまにふつまに　牝馬肥馬也。ふつはふとなり。
をしとたかへ
わ　わかゆ　わかき鰷魚也。わかゆつるとつゝく。
わすれ貝　三津の濱なるわすれかひと有。
加　かりしもの　鴈也。折木四哭之と書。契沖の説也。
かまめ　鷗鳥也。かもめなり。
かもしもの　しものは助語也。只鳬といふことは也。
かもの羽かひ　かいは羽の上を云。今もかいかたといふ也。
かほとり　まなくしは鳴とつゝく。何の鳥ともしりかたし。見安云、むしはみと云り。てらつゝきなり。

（一七ウ）

かけのたれを　庭つ鳥かけのたれをのしたりをと

つゝく。

かこ　海中にかこそ鳴なると有。鹿子と書。舟中にて鹿を聞なり。一説かこは鳥の名、鴨とも、又舟子の哥なりとも有。

かこしもの　鹿弭也。しもは助字也。かことはかりも。

かた山きゝす　山側雉也。

かゝなく鶯　わしのなく声也。季云、わひ鳴也、又こゝら鳴也。

かも　おきつ鳥かもといふ舟と有。水に泛もの故舟の異名とす。

かふこ　桑子也、蠶なり。

かけろふ　ゆふへとつゝく。蜻蛉は夕をまたぬゆへ也。又一説天象門に出。

（一八オ）

与　よふことり　契云、この鳥万葉にあまた出たり。古今集は春部に入て只一首あり。哥人傳受ること也とそしりて扨何の鳥ともいはす。長流云、こは付字也。人をよふことく鳴鳥也といへり。

愚案、哥人の家に傳受といふなれは何の鳥ともしらぬとてすむ事也。契沖、長流ともに何の鳥ともいはぬは尤さあるへき事也。それはそれにして此鳥は鳩なり。春に定むるは泥みなり。

大伴郎女哥に、

よのつねにきくはくるしき呼子鳥声なつかしき時にはなりぬ

とあり。しかれは季をもたぬ鳥なり。

よこゑ　杜鵑の夜鳴声なり。

（一八ウ）

よからす　夜鴉也。

よこもり　態藝門。

太　たかへ　鴛鴦とたかへと有。小鳧也。

たつのま　竜馬なり。

たつかねの　鶴の鳴声也。今朝なくなへにとつゝく。

たちこも　さはきとつゝく。起鳧也。

つ　つなし　とる比美の江と有。魚名。

つるむら　鶴群也。あまのつるむらと有。

南　なつらす　魚つるなり。

なくとひとつく　ほとゝきすなくとひとつくと有。

（一九ウ）

こもり声になくなり。

む　むさゝひ

（一九オ）

むなわけ　さほ鹿のむなわけと有。草を分る鹿をいふ。

うまそつまつく　人にこひらるれは乗たる馬のつまつくなり。

うまたきゆき　たきはたくる也。馬のたつなをたくり行なり。

うち羽ふり　雞の羽たゝきなり。

うらへすへ亀もなやきそ　ト部をまうけて亀トをするに及はぬとなり。

うまつからしに　往来に馬のみつかれてせんなきなり。

うくひすのをと　鶯の声なり。

うけ　器財門に有。

うえをふせ置　同右。

のとよひ　ぬえ鳥ののとよひと有。鵺の声はのと声とて

くくそふな　鮒の一種也。

ややかたをのおほくろ　白ぬりの鈴とりつけてと有。鷹をいふ也。季云、矢に似たる尾のあるをいへり。一説八の字の形のふのある尾の鷹なるへきか。大黒はたかの名なり。

ままとり　すむうなてと有。まとりはしまつ鳥也。鵠也。爰は海とつゝく。

不ふつ馬　ふとむまなり。肥る也。

ふた　夫馱と有。荷馬也。是は音を用ゆ。いかゝとおもへとかゝるものには和訓なくて漢語を用る例おほし。

ふもたし　器財門。

（二〇オ）

己こふるとり　いにしへにこふる鳥と有。時鳥をいへり。

こまをり　器財門。

ことひ牛　雄牛也。

こふこのまゆこもり　蠶繭にこもる也。
こまのつめいつくきはみ　馬蹄のあとつくかきりなり。
このまたちくき　杜鵑の木の間をとひくゝるなり。
あみとり　網にてとりたる鳥なり。
あさふますらん　朝に馬をあゆませ行なり。
あはひの貝　片おもひとつゝく。鰒は單殼なり。
あしかに　葦間にすむ蟹なり。
あかく　吾こまのあかくとあり。足にてかく也。こまのあゆむ事

（二〇ウ）

なり。又青こまのあかきのはやみとも。
あやしき亀　文負る神亀と書。洛書の事也。
ありかよふ　蟻の同し道を行通ふ也。それを人の往還茂きに比していふ也。又とりはなすあり通ひつゝとも。
あし　すむすさの入江と有。八雲云、鰺といふ魚也、又一説に鳥の名。
あたみたるとら　ほゆると有。あたみたるはにらむこゝろか、契云、敵を見たるなり。
あひき　漁人の網引なり。
あちむら　小鳧也。今もあち鴨と云。千万群をなすもの也。又いさとつゝく、友をさそふ也、又さはきともつゝく。

（二一オ）

あゆこさはしり　小鮎也。さは助字。
あきつ　見安云、村鳥の名也。
あらくま　猛熊なり。
あさからす　夜あけからすなり。
さかとり　坂をとひこゆる鳥也。
さはへなす　さはくとつゝく。五月蠅のことくなり。
さのつとり　野の鳥なり。
みなわた　みなと云貝は腸の黒き故髪にいひかけたり。此説契沖とらす、しかれとも又分明ならす。
みすみのつほ　鹿の耳は御墨の坩といへり。
みかさのはやし　鹿の角を用ることくみえたり。はやし

（二一ウ）

は用ゆること也。つみはやしみはやすのこゝろ
賞するなり。季云、林の字の注分明ならす。
みゆみのゆはす　爪を弓の弭に用ゆるか。
みはこのかは　鹿の皮を御筥にきせるとみへたり。
みふての林　鹿毛を御筆の毛に用る也。
みなまの林　鹿肉は御膾に用る也。肝をも用ゆとい
へり。
みしほの林
みなとのすとり
みかもなす　ふたりとつゝく。水鳧のことくふたつ
ならふとなり。
之　しひつる　鮪釣也。又しひつくとも。
（二二オ）
しゝみ　蜆也。すみのえのこはまのしゝみあけもみ
すと有。
しめ　鳥の名なり。
したゝみ　小さき螺に似たる貝也。
しなかとり　安房とつゝく枕詞也。水中鳥と書。水
中の鳥は水の泡のことくなる故、あはのまくら
ことはとする也。季云、此時はみなかとりと古
点の通りによむと云。新点はしなかにて、仙説
は猟者の名なるへしといへり。
しゝくしろ　よみといふにつゝきたり。肉奇也。に
くの味のよきなり。
しこほとゝきす　うれたきやしこほとゝきすと有。
橘を
（二二ウ）
ほとゝきすのちらすをにくむ哥也。きのとくな
る事成にくきほとゝきすか花をちらすと也。し
こは、醜の字を用ゆ。
も　もふしつかふな　藻にふしかくるゝ也。つかは手一
束はかりのたけなる鮒なり。
もちとり　又ほつ枝にもちひきかけとも有。もちは
粘也。鳥は、もちにかゝるものなり。
もゝちとり　榎の実もりはむもゝちとりと有。
もりはむ　榎のみもりはむと有。群がり食ふ也。
寸　すたち　鳥のたまこのかへりてはしめて巣を出るな
り。

すかる　こしほそのすかると有。蜂のことなり。

（二三オ）

すとり　州に居る鳥也。又みさこをいふとも。

すゝかけぬはいま　駅路鈴なき早馬也。しかれはわたくしのはや馬なり。

すたく　集るなり。野もさはに鳥すたけりと。

すなとれる　態藝門に出たり。

（二三ウ）

服食器財

以

いは舟　さくめかいは舟とつゝく。

いかり　をろしとつゝく。碇なり。

いなむしろ　稲のわらむしろ也。藻の名と別也。

いくし　串に幣をはさみたる也。いは五也。おほき心。

いはひへ　いはひほりすへと有。見安云、酒いるゝかめ也といふ。しかれは神に捧る酒とみえたり。此説いかゝあらん。斎戸とあれはものいみする室なるへし。

羽

はしゆみ　はしの木の弓なり。

はまつと　海邊よりのみやけなり。

はり目　わかせこかきせる衣のはりめおちすと有。

針の縫

（二四オ）

目ことに吾おもひを入ておとさぬとなり。

はねかつら　花かつら也。童女の髪のかさりなり。

はいさす　紫ははいさすと有。灰をさし入て染る也。灰はつはきの灰也。故につはいちとつゝけり。つは市は大和の地名なり。

はな縄　牛の鼻をさす縄也。はな縄はくれと有。くれはあたゆるなり。

はりふくろ　衣ぬふ針也。旅立人にをくるなり。

はしむかふ　ふせのみことゝつゝく。兄弟二人なり。箸はふたつあるゆへなり、箸向と書。

二

にきたまの衣　季云、にきたへの衣と同し心也。やはらかにほそく

（二四ウ）

玉の衣といふなり。見安云、和魂也ときこえたれとも衣とつゝけは通しかたし。

保　ほかもはれる　帆をはれるか也。はるは今いふかくるに同し。

へにもともにも　大舟のへにもともにもと有。舟の前後也。

へむかる舟　舟の艪の向ふ也。

戸　とも矢たはさみ　諸矢也。袖中云、小指にはさむ矢をいふと。

ときころも　みたれてとつゝく。ときはなしたる衣なり。又ときあらひ衣とも。

とあみ　鳥をとる網なり。

ともし火をつく夜になそへ　燈を月夜の光になそらへて也。

ち　ちから車七くるま　ちから車は牛馬を用ひす人力にて

（二五オ）

をす車也。それを七なり、おもきをいふ。季云、只重荷をつむ車といへり。

奴　ぬきす　竹のすなり。盥に置事あり、人に水のかゝらぬため也。

ぬのかた衣　貧者の服なり。わたもなき布かた衣ともあり。

乎　おほみけ　天子の御膳也。

おほ舟の思ひたのみて　又たのみし君とも。大舟に乗れは安堵する故也。又たゆたふとも有。たゝよふ也。大舟は急にゆかぬ也。

をつの　吹なせるをつのと有。小角也。軍中の吹もの也。契云、小角和名くたのふえと讀。

おほきみのしほやく　天子御膳に用る塩をやくなり。

をけ　麻笥と書。

（二五ウ）

和　をけかたのふたあやうらくつ（ママ）

おきつもの　海中の物のこゝろかと川子説。

わさみの　季云、よき管にてつくれる蓑也。それを遠江のわさみ野によせたり。

わさいゐ　早稲の飯なり。

わかめ　今の和布藻也。和名集にきめと云。

わさほのかつら　早稲の穂の長くてかつらのことき

也。

可かち　防人の哥に、まかいしゝぬきと、かちひき折と二を一首によめり。しからは、かちは舵なる事明也。かいは楫、篙・櫓の類とわかつへし。畢竟むかしはかち・かいの差別なかりしとみえたり。かち引

（二六オ）

引折、契云、此集かちと云も櫓の事也。櫓を引たをりて舟に横にやる也。又ほり江漕なるかちの音とあり。

かちま　舟の梶とる間なり。

かたみ　人の死して後にのこれるもの也。

かみしまち酒　釀しまち酒とあり。

かたもい　食物をもる椀なり。

かすゆ酒　貧者の酒也。糟を湯にてときたる也。

かにはまきつくる舟　桜皮と書て、かにはと讀。いまのかばのことなり。

かせ　うみ苧かくといふとあり。今のかせのこと也。

（二六ウ）

かゝい　舟こくかい也。かゝいの音とあり。

かしふりたて　舟を水中につなく也。今はかせといふ。

かたのまよひ　麻衣かたのまよひは誰かとりみんと詠り。衣の肩のやふれたる也。衣の古くてやふれんとするをまよひと云。又是をよるともいへり。旅客の衣服にことたらぬをいふなり。

かふら　響矢と書り。鳴鏑也。

かけはきのをたち　懸佩之小剣と書。太刀は帯取の緒にかけてはく故なり。

かつらかち　桂槳也。今も東国かつらの木といふは水にくさらぬ木とて用るなり。

（二七オ）

かさのかりて　笠のいたゝきのわにひもをつくる所なり、よりてわさみのとつゝく。

かはの衣　蛾羽の衣と書。蛾の羽に似たる帛なり。

かとり　縑の字を用ゆ。六花集にかとりはすゝしといふ、しからは蚊をとると云こゝろか。

から帯　韓帯とあり。

かるはす　諸説分明ならす。季云、かる矢をいふと、
しからは今いふからはす也。但からうすの転せ
るか。
からうす　碓子と書り。
かまゝろ　鎌のこと也。まろは付字の例也。
かも　おきつ鳥かもといふ舟と有。水にうくものゆ
へに　（二七ウ）
舟の異名とす。
かはの衣きて角つきなから
かりて　人に物をかりたる價也。こゝははたこやと
ちんのことなり。路費をもたすしてなかき冥途
をゆくとなり。
かたしほ　鹽なり。潮とまきるゝ故乾きしほといふ。
からしほとあるも同じ、辛きにてはなし。
かな　弓削の河原とつゝく。ゆみをむらする刀なり。
木をけつるかんな也。まかなと有。まはほむる
ことは。かなは、かたな也。今のかんなは後人
の作也。むかしはやりかんなとて平刃やりのこ
とくにてすこしそり　（二八オ）
たるものなり。
かちから　梶柄と書。かちの手ににきる所なり。
かたいと　かたこ糸也。あはさぬいと也。
かさし　髪にさすなり。
与
よろつゝき　萬の貢物也。
太
たまたすき　かけてといはん枕ことは也。竹取の哥
に母にいたかれたまたすきと有。是は襟襷の字
をかけり、よりて仙云、児を負ふ衣といへり。
又たまたすきうねひの山とつゝく。玉はほむる
詞、田をすくこと也。ゆへに畝とつゝくと也。
愚案、うはをに通すれは苧とつゝくるか、たす
きは苧にてつくる故に。　（二八ウ）
たなゝし小舟　無欄小舟と書。欄は今のかきたつの
事ならん。かきたつなけれはたつもなし。しか
らは扁舟の事か。
たまくしけ　をゝうとつゝく、又見んとも、又おく

ともつゝく。おくはそこ也と季云。
たまも　玉裳也。ほむることは也。
たまたれのこす
たまとこ　玉床なり。
たくなは　長きとつゝく。海上のたくる縄也。古今集に、あまのなはたきとも有。童蒙抄云、あみの手縄也と。
たまかつら　草木部に出す。
たひ　今のてうちん也。古はたいまつならん、又荼毘にて

（二九オ）

火葬の火ともみゆ。
たくひれ　たくは白き也。白巾也。又一説見事なる也。
たかたま　しゝにぬきたれとつゝく。①
たまころも　さひ〳〵しとつゝく。さひ〳〵は衣の鳴る音也。②
たまくしけなるたまくし　めつらしけんもと有。契云、かみさひけんもとよむへしと有。すへてふりたることをかみさふるといふ。
たかつ杖　手に握る杖也。
たすき　白たへのたすきと有。手の助也。
たとへのあしろ　宇治人のたとへのとつゝく。
たふて　つふて也。飛礫をいへり。

（二九ウ）

たまき　玉釧也。たまたまきは玉指環也。くしろともいふ。
たまゆら　玉響と書。玉のなる音なり。
たゝみこも　へたてあむとも、又かさねあむとつゝく。
たゝり　うみをのたゝりと有。契云、和名集絡垜をたゝりとよめり、是なりといふ。
たまゝきのをかい　玉纏之小撕と有。
たふさき　犢鼻褌也。
たかつき　高杯也。したゝみといふ貝をあへ物にしてたかつきにもるといへり。
たつかゆみ　手に握る所ある故にいふ。
たまつさのこと　ふみの言なり。

（三〇オ）

たかび　太刀の柄也。やき太刀のたかひと有。

たかたま　竹を管にきりていくつもつらぬき神に奉るものといへり。

そ

袖かへし　袖をたかひにさしかゆる也。

袖つくはかり　ひろせ河袖つくはかりあさしと有。水底にそてのつくほとなり。

袖つく　袖をつく也。七夕に詠り。男女の袖をつらぬる也。

そぎいた　もてふけるいたまのあはされはと有。季云、へき板にやといへり、又一説をあけて杉板かとあり。

そつ彦まゆみ　葛城のそつ彦まゆみと有。季云、葛城襲津彦は仁徳帝の后の父なり、しかれは弓をつ

（三〇ウ）

くる人にあらす。弓を能射たる人ゆへかくいふかと。

ぞうさし　櫃にそうさしと有。そうは鎖也。さすはおろすなり。

そや　をひそやと有。背におふ征矢也。そよと受たり。

そてつき衣　宮人の袖つき衣と有。袖と身とに文彩のかはりたる也。又童子にも詠り。これもつき〳〵の衣の類か、又はいまた袖を長くせぬか。

つ

つけまくら　黄楊木の枕なり。

つかふるいろ　名つけくる紫とつゝけたり。凡官人の服色なり。

つるきたち　みとつゝく、又名ともつゝく。契云、かちの名

（三一オ）

をほる故といへり。愚案、なは刃也。やいはを云。又ときし心ともつゝく。男子の心をいさきよくもつなり。

つけのをくし　髪梳之小櫛と書、又黄楊之小梳とも書。又つけくし、又日の本のつけの小くしともつゝけたり。

つくえ　今の食机也。只ぜん。

つまよるをと　梓弓つまよるをとゝつゝく。つまよるは、矢をこゝろむること也。梓弓にはいかゝあつさゆみといひて、扨矢をつまよるといふ事か、つまよるといへは直に矢のことなりと心得へし。

つと　みやけなり。こゝに山つとゝあり。

つらゝにうけり　舟の連りて泛ひたるなり

（三一ウ）

つら　弓の弦なり。

つえたらす　つえは杖也。杖は一丈也。故に八尺とつゝけたり。

なには管かさ　きふるしとつゝく。著すにをいてふるくなりたる也。

なくるさ　投る矢也。射はなつ矢也。一本になけくさと詠り。又なくやとも有。季云、投る梭といへり。

なれ衣　褻衣也。いもかきせてしなれ衣とあり。

なゝくさのたから　七宝也。

なる矢　響矢とあり。鳴鏑也。

南

む

むすふかた衣ひつりにぬひて

むかはき　行縢なり。

（三二オ）

宇

うつ麻苧　麻を打てほそくする也。仙云、うつはほむることは。

うはに　おもき馬荷にうはにうつ。

うきくさ　ぬくことくとつゝく。屣なり。

うみをなす　長柄とつゝく。苧をうめは長きゆへなり。

うけ　すみのえの津守あひきのうけの緒とあり。うかひゆかんとつゝけたり。網を海へ入てしるしに上にうけて置ものなり。

うえをふせおき　山川にうえをふせ置と有。笱也。ふせて置也。魚とる篭なり。

うす染衣　くれなゐのうすそめ衣と有。

うす　冠のかさり也。日本紀に鈿花と書。季云、かむさしの

（三二ウ）

ことゝいふ。

うつくつ　長流云、うつくしき沓也と。契沖是を信せす、みやけとつゝくにわけあらんとのみいへり。季云、うつくしき沓也。みやけにはつゝかす、下の句のあとをつらねてにつゝくといへり。うつたへ　へてをる布とつゝく。うつくしくたへなる布也。

久

くるへき　長流云、糸をかくる器也。糸をよりあはするもの也。契沖云、詩経弄之瓦の瓦にくるへきとつけたり、又枕草紙を引てくるへきは今のすりうす也と、されはくる〳〵とまはるものと見えたり。季云、わくといふ物に似て大きなりと。

（三三オ）

くしろ　季云、袖中抄に内典云在指曰鐶在臂曰釧とあり。只釧なり。契云、肱まきなり。

くほ舟　木をほりくほめて舟とする也。今のうつほふねなり。

くろくつ　ぬひしくろくつとつゝく。くろ履とあり。

くろきしろき　黒神酒白神酒也。大嘗會にこのふたつ有。延喜式にあり、米をつく多少なり。

や

やまたつ　こゝに山多都祢とあり、本注に山多都者今造木者也。季云、山たつねとは山たつの也。ね・の通し用ゆとなり。鐺和名たつき廣刃斧なり。こゝはき文字を略して山たつといふ也。又やまたつのむかへまいらんと詠り、

（三三ウ）

分明に人の事ならん。本注造木者とあるも斧斤の類ひにあらし。山守なとの材木をこるものにや。

やきたち　かとうちはなつとつゝく。契説分明ならす。たちはやきてうつ故にいふ。

やふねたき　八舩たき也。たきは引也。おほく舟をひくなり。

やしほの衣　くれなゐの八塩と有。やしほはいくたひも染たる也。このくれなゐに呉藍の二字を用ひたり。

やそかゝけ　八十乃楫をかけてなり。

やそかぬき　八十の梶ぬきなり。これら皆櫓楫の類

也。舵にあらす。

満

まとかた　ゐるまとかたとつゝく。的形也。

（三四オ）

まくらつく　宮室部に出。

まかち　しけぬきとも、又しゝぬきともつゝく。おもかち、とりかち両方なり。凡ふたつそろへたるをまといふ。両方に櫓を立たるなり。まかひも同し、舵にはあらす、又まかひかけとも。

まそゆう　真苧にてつくるゆふは短きゆへ、みちかゆふと云。

まそかゝみ　磨しとつゝく、又、はふりらかいはふみむろのまそかゝみと有。みむろは神祠也。かゝみをかくる故也。又まそみかゝみとも。

まくらかたさり　長流云、こゝはかたさらすならんといふ。かたさらすは、まくらを離れぬなり、又枕からさすとも。

（三四ウ）

またまつく　玉をつゝくる也。玉をつゝくるは緒にてつら貫、よりてをと受るなり。季云、こしとつゝけたり。

まちさけ　人をまちまうけたる酒なり。

まい　幣の字を用ゆ。月に幣をさゝけてこよひをなかくしてたへとねかふ也、又道の神たちまいはせんとも。旅中の幸をいのるなり。賄の字あたれり。この字邪曲にかきらす凡人にものを贈るをいふ。

まゆみ　あたゝらまゆみと有。陸奥の名所なり。又かつらきのそつ彦まゆみとも。

まそころも　是は旋頭哥なれは此一句七字によむへし。季云、真苧衣也。馬乗衣と書たれは馬上の衣か。

（三五オ）

まそて　まは左右也。両袖なり。

まさけ　もちとつゝく。まさけは鈴の事なり。

またらふすま　斑衾なり。

まかこ矢　神代紀。

まくらたち　枕太刀也。寝戈のことし。

まくらうこく　いねすしてまくらのいろ〳〵となる

也。

け

けころも　裘也。季云、見安にけはけはれのけなり、こゝは春をいはんまくらことはなり。

けにもる　飯とあり。けは笥也。

けのころも　褻衣也。いさや河けの衣とつゝく。契云、川の音のたつといふこゝろにて思ひのせつなるをいふと。

（三五ウ）

ふ

ふくし　草をほるもの也。こてのことし。

ふたさや　刃物をふたついるゝ家也。下に只家とつゝく。

ふなはり　舟の梁也。是に坐して楫をつかふ故にゐかいのまくらことはなり。

ふなよそひ　舟をこしらへかさる心也。

ふみ木　はたものゝふみ木と出り。機をゝる時足にふむ木なり。

ふる衣　旧くてすてたる衣なり。

ふもたし　馬にこそふもたしかくもと有。ほたしをかくる也。

ふなたな　舟のはたに用ゆる板也。今もいふことはなり。

ふなかさり　舟をかさるなり。

己

ころもにきなし　契云、是はあやまり也。きぬにつくなすと

（三六オ）

よむへし。なすは如也。きぬにつき如也。

こまつるき　高麗剣也。わさみか原とつゝく。

こまくら　木の枕なり。

ころもてのわくこよひ　わくは別るゝ也。男女わかれさるなり。

こまをり　駒牢也。馬柵と書。柵のことくに木をたてゝ馬を入置なり。こまをりのしめゆひしと有。

こしき　飯をむす甑也。いにしへは飯を皆むしたり、唐もしかり。

ことのしたひ　筝の腹の穴のある所なり。

こまにしき　高麗錦なり。

こそめの衣　くれなゐのこそめの衣と有。こそめは濃く染たる也。

くれなゐのうす染衣ともあり。　（三六ウ）

亭　てたまあしたま　女子の手足にかくる環也。

安　あらたへ　あらき布也。藤原とつゝく、又衣とも有。

藤布あるゆへなり。

あつまとののさきのはこのにのを　坂東より新嘗の米を箱に入て馬にのせ来る也。其荷の緒也。荷前の使は諸社へ初穂の米をつかはさるゝなり。

あつさゆめつるをとりはけ　梓弓弦をとりはけ也。

あつさ弓音にきゝつゝ　弓の音なり。

あさのころも　白たへの麻の衣。凶服也。

あらとこ　そゝうなる床也。　（三七オ）

あしろ木　網代の木也。

あちこり　季云、美味のあつまるこゝろ也。国をほむることは也。

あけのそほ舟　丹をぬりたる舟なり。

あさて　麻也。葉の人の手に似たるよりいふ。庭に立とよめり。農家は庭にも麻をうゆ。

あさふすま　なこやか下にふすとつゝく。厚衾也。

あつきふすまはやはらかなれはなり。

あはをによりて　たまのをゝあはをによりてと有。

水の泡はむすふゆへあはをと云也。契云、あはをと云一名かと云。季云、あはせたるをといへり。

あさふすま　貧者のふすま也。　（三七ウ）

あゆひ　足袋の類也。足をまくもの也。又きやはんの類とも見ゆ。旅立の体によめり。

あしはや小舟　舟のあしのはやき也。

あをふすまきて　青衿と書。

あきさり衣　秋の衣也。春服の例なるへし。

あきつはの　袖ふる又あきつはの匂へる衣とも有。

愚案、碧羅衣なり、蜻の羽にたとふ。

あらき　弓也。ぬりも巻もせすうちおろしたるまゝのゆみ也。こゝは弓力のつよきにもちゐす。

あやむしろ　もやうのある席也。

あかもすそ引　紅裙を曳なり。

（三八オ）

あらそめのあさら衣　桃色をあら染と云。退紅と書。紅をへらしたるいろなり。もゝ染とも。

あきつひれ　蜻蛉の羽のことき巾也。

あつさ　みてにとらしと有。こゝはあつさとはかりにて弓也。

ありきぬ　あらき衣といふことか。契説未詳。

あさてつくらひしきもなす

あちいゐを水にかみなし　酒を造る也。味飯と書。

あはつき　契云、粟を竹筒に入てつきかため糟にかくして食するを粟つきと云よしきけりと。愚案今の柿つきなといふ類ならんか。

あふみつかすも　水のまさりて鐙につくなり。

（三八ウ）

あふらひ　燈火なり。

あから引　膚とつゝく。

さ

さてさしわたし　魚をとるさてを水中にさしあまねきなり。又さてはえしとも有。はえは所〳〵にさしまはるなり。

さかつほ　酒壺なり。

さくゝみ　さははやき也。くゝみはくゝる也。舟の水中を早くくゝるなり。

さつゆみ　薩摩より出る弓也と。愚案、さは小也、つは助字、唐半弓の事か。

さつ矢　薩矢といへり、しかるにこゝは東国の人の哥な

（三九オ）

れはさつまの矢は用ひまし。季説にも上さしの矢といへり。

さつきの玉　くす玉也。續命縷のこと。

さほ舟　せまくちいさき舟なり。

さすなへ　鍋のことなり。

さしは　鷲の羽を矢にはぐ也。一云翳をさしはと讀これに用ゆる羽也。季云、上箭也。上さしの矢かと云。

さをさしくたりかちひきのほり　かちとさほと両に用。

さ　矢也。いをさたはさみと有。五百箭をはさみも

つなり。又、六花集の説に、弓は兵具の中にはさときものゆへさつ弓といふといへり。

（三九ウ）

喜

きぬかさ　華蓋也。月をあみにさしとは此蓋を月にたとゆるなり、又青ききぬかさとも。

きひのさけ　契云、吉備国にて造る酒かと云。愚案に、やはり黍にてつくる酒ならん。

由

ゆうはな　木綿花と有。見安云、木綿花といふ木有花如芙蓉実如朱杯子、童蒙抄にもありと。

ゆうたゝみ

ゆきかくる　とものをひろきをゝともあり。

ゆうはた　季云緻纈也といへり。袖つき衣とつゝく。小児の衣は袖をはなたす身衣につくる也。

見

みとらし　弓なり。手にとりもつ故也。みたらしとも有。

（四〇オ）

みたらしの弓は重ね詞也。

みわ　酒也。むまさかのみわとつゝく。又すへまつるともつゝく。季云、わとは酒の字なりといへり。

みけむかふ　みけは食也。食にむかふはちかきをいふ。

みこしたて　葬送の儀式にいへり。

みつあひによれるいと　みつくりの糸なり。

みちゆきつと　途中にて得たる物を人にをくる也。

みけし　御衣なり。

みやけの酒　ことゐ牛のみやけの酒とつゝく。牛は酒を呑は身のやくることく熱するとなり。

みかさにぬへる菅　みかさは笠也。蓋にあらす。

（四〇ウ）

みしま菅笠

みてくら

みはなたの絹の帯　縹絹帯と書。

みすみのつほ　みかさの林、みゆみのゆはす、みはこのかは、みふての林、みなます林、みしほのはやし己上委は鳥獣部に出す。

みぬさ　とるみわのはふりとつゝく。御幣也。

みたて　御楯也。天子の防衛也。しこのみたてと有。

之

しこは、あらくつよき也。

しろたへの衣　妙の字、細の字をたへとよむ。契云、白き色をたへといふか。

（四一オ）

しきたへのまくら　又しきたへの衣、又しきたへの袖とも。季云、枕・衣・袖に用ゆ、たゝ敷こゝろ也。まくらをくゝる涕とつゝく。

しめ　道の隈わにしめ結へわかせと有。しめはしりくめ縄なり。往来をとむるもの也。

しらかつけ　さかきの枝にしらかつけゆふとりつけてと有、又しらかつくゆふは花かもと有。仙云、しらかは白紙の四手なり、しらにきてなり。

しつはた　賤人のをる機也。帯とつゝく。

しらまゆみ　白木の真弓也。是は直に月にたとふ。

しつくら　下鞍也。

しつたまき　倭父手纏と書。父は文の誤り也。倭文をしとり

（四一ウ）

しつとりとよむより、賤者にかり用ゆる也。季云、古はいやしき女も手玉足玉あり、賤女の手玉なりと。

したひ　琴のしたひと有。ことの下は空にて樋のことくなる故かと季云、下樋と書り。

しらたま　白玉也。何にてもほむる時のことは也。こゝはしらたまの人とつゝく吾こふる女をさす。

しつぬさ　しつり帛のぬさ也。絹帛を神に奉る也。

しのきは　契云、敵をしのくゆへ也と。愚案、矢の三の羽のやり羽をしのき羽といふか。季云、鷹にてはきし矢といふ。

しらき斧　新羅の斧也。

（四二オ）

比

しほ舟　川舟に對して潮舟と云也。海舟の事なり。

しろたへのかさり　白たへは白布也。こゝは凶服にて云、あさ衣といひしも喪服なり。

ひれ　領巾也。しろたへのひれこもりと有。

ひとつきの酒　一杯酒也。

ひきた　板を二枚あはせてくゝり是をひきならして

鹿をおとすなり。ひたとはかりも。

ひもかゝみ　ひものつける鏡也。長流云、袋に入たる鏡也と。

ひしをす　醤油と醋となり。

ひたさを　季云、麻苧はかりにてをれる裳也。

ひめかふら　季云、蕃目鏑かといへり。見安云、ひめと鳴る

（四二ウ）

ゆへなりと。愚案、かふらに似たるしめといふものあり、此語の転せるか。

もゝさか舟　百尺の舟也。舟の長さ也。仙云、百石の舟也。季云、行基の哥とて、

もゝさかにやそさかそへてたまへりしちふさのむくひ今日そ吾する

といへるを引て是は百八十石といふ事なれは仙説可也と。

もかりふね　藻をかりとる舟なり。

もたま　裳につけたる玉なり。

すみなは　はへたることくとつゝく。工人の墨斗也。

又飛驛人のうつすみなはとも有。

すけき　小簾のすけきと有。

（四三オ）

すり衣　もやうをすり付たる也。只染たる也、おり物ならすして染たる衣といふことなり。

すみうら衣　あかきぬのすみうら衣とつゝく。すみは純の字を用ゆへし、はらぬをいふ。此字をにひとよむと契沖いふ、しからはもみうらの事なり。

すゝかね　はゆまむまやとつゝく。驛路鈴なり。

すこも　食簟也。食事の時のしきものなり。

すりふくろ　燧を入るゝ袋也。旅の用意のもの也。

季云、すき袋也と、透たる袋也と。

（四三ウ）

（『萬葉集詁』中、終わり）

注　①　②の二箇所に、それぞれ次のような朱の書きこみがある。

①　竹玉也　（二九ウ）

②　さや〳〵也　（二九ウ）

（了）

付記　本稿は、「五井蘭洲『萬葉集詁』上（翻刻）」（『相愛国文』第六号・平成五年三月）の続稿である。

今般、無窮会神習文庫所蔵の『萬葉集詁』（三冊本）を閲覧する機会を得た。神習文庫本は、本稿が底本とした吉永本とは異り片仮名表記がなされているほか、内容も同一ではない。吉永本・神習文庫本の検討、研究については、引き続いての課題としたい。

ご高配を賜わった無窮会神習文庫の方々に、御礼申しあげます。